

# 島根県農業気象広報特集

—平成17年農林作物をかえりみて—

平成18年5月

島根県  
松江地方気象台

# 目 次

(執筆者)

平成17年の気象概況	(松江地方気象台 調査官 梅原 伸)	1
水 稻	(元農業技術センター 現東部農林振興センター出雲事務所 農業普及部 出雲東地域振興G課長 狩野 直)	4
	(農業技術センター 専門農業普及員 板垣紀夫)	
麦 類	(農業技術センター 専門 研 究 員 橋本 忍)	10
	(農業技術センター 専門農業普及員 板垣紀夫)	
大 豆	(農業技術センター 主 任 研 究 員 山口裕司)	12
	(農業技術センター 専門農業普及員 板垣紀夫)	
野 菜	(農業技術センター 野菜技術普及G課長 角 治夫 専門農業普及員 山本晃二 松本修司 石川真治)	15
	(農業技術センター 専門農業普及員 板垣紀夫)	
花 き	(農業技術センター 花き技術普及G課長 稲村博子 専門農業普及員 川村 通 主任農業普及員 石井満彦)	18
果 樹	(農業技術センター 果樹技術普及G課長 山本孝司 専門農業普及員 小室正夫 長岡義治 元農業技術センター 現農業経営課 技術普及G 企画員 高田 光)	21
	(農業技術センター 専門農業普及員 板垣紀夫)	
茶 樹	(農業技術センター 専門農業普及員 神城文典)	27
造 林	(林 業 課 専門林業普及員 坂越浩一)	29

## 平成17年の気象概況

1月から2月にかけては、短い周期で冬型の気圧配置となり、寒暖の変動が大きな状態が続き、降雪量は平年を下回った。3月は短い周期で天気に変化した。4月から6月にかけては高気圧に覆われて晴れる日が多く降水量は少なかった。特に6月の降水量は松江で平年の13%、浜田で9%とかなり少なかった。7月になると梅雨前線の活動が活発となり、前半を中心にまとまった雨が降ったため、4月から続いた渇水状況は解消された。9月上旬は台風第14号や前線の影響で西部を中心に大雨となったが、中旬から10月にかけては、高気圧に覆われ晴れて気温の高い日が多かった。11月中旬頃からは寒気が入りやすくなり、12月は気温の低い状態が続き、山地を中心に12月としては記録的な大雪となった。

年平均気温は全域で高かった。年降水量は全域で平年並であった。年間日照時間は、松江・浜田ではかなり少なく、西郷は平年並であった。

中国地方の梅雨入りは6月11日頃で、平年より遅く、梅雨明けは7月18日頃で平年並、梅雨期間の降水量は松江327.5mm、浜田317.5mm、西郷383.0mmであった。

### 1月

気圧の谷の通過後、冬型の気圧配置に変わり雨や雪となる日が多かった。特に月末は冬型の気圧配置が強まった。

上旬：気圧の谷が短い周期で通過し、その後は冬型の気圧配置となったため曇りや雨または雪の日が多かった。特に期末は冬型の気圧配置が強まった。

中旬：冬型の気圧配置となる日が多く、曇りや雨または雪の日が多かった。

下旬：天気は周期的に変わり、晴れた日もあったが、気圧の谷の通過やその後の冬型の気圧配置で雨や雪の日が多かった。特に期末は冬型の気圧配置が強まった。

### 2月

低気圧の通過やその後の冬型の気圧配置のため雪や雨の日が多かった。

上旬：始めは冬型の気圧配置で雪が降った。その後、天気は周期的に変わり、晴れた日もあったが、低気圧や気圧の谷の通過とその後の冬型の気圧配置で曇りや雨の日が多かった。

中旬：低気圧の通過とその後の冬型の気圧配置で雨や雪の日が多かった。

下旬：天気は周期的に変わり、晴れた日もあったが、低気圧の通過やその後の冬型の気圧配置で雲が広がりやすく、雪や雨の日があった。

### 3月

気圧の谷や低気圧の影響で雨や雪の降る日が多かった。特に中頃には冬型の気圧配置が強まり大雪の日があった。

上旬：前半は寒気や低気圧の通過で雨や雪の日が多かった。後半は移動性高気圧に覆われて概ね晴れた。

中旬：気圧の谷や低気圧の影響で曇りや雨の日が多かった。なお、期間の始めは強い冬型の気圧配置で大雪となった。

下旬：期間の終わりに晴れた他は曇りや雨の日が多く、24日と25日には冬型の気圧配置になり雪が降った。

### 4月

移動性高気圧に覆われて晴れた日が多く、全般に気温が高く、降水量は少なかった。

上旬：気圧の谷や前線の通過で曇りや雨になった日と、移動性高気圧に覆われて晴れた日が周期的に変化した。

シイタケ	(林業課)	統括林業普及員	菅田 勲) . . . . .	30
森林保護	(林業課)	主席林業普及員	井ノ上二郎) . . . . .	31
平成17年農業気象災害被害状況 . . . . .				33

中旬：移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、初めと終わりは気圧の谷の影響で曇りや雨となった。

下旬：気圧の谷の影響で曇りや雨になった日もあったが崩れは小さく、移動性高気圧に覆われて晴れた日が多かった。

#### 5月

移動性高気圧に覆われて晴れた日が多く、降水量は少なかった。

上旬：移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、初めと中頃は低気圧や寒気の影響で雨の日があった。

中旬：12日と18日は気圧の谷や前線の影響で雨となった。その他の日は、高気圧に覆われ概ね晴れた。

下旬：移動性高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、前半は気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日があった。

#### 6月

梅雨前線が西日本の南海上に停滞したために、島根県は高気圧に覆われて晴れた日が多く降水量も少なかったが、月末は梅雨前線が日本海まで北上して、梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が入ったため曇りや雨の日となった。

上旬：高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や寒気の影響で曇りの日が多かった。

中旬：高気圧に覆われて概ね晴れる日が多かったが、11日は低気圧の通過で曇りや雨となった。広島地方気象台は「11日頃、中国地方は梅雨入りしたとみられる」と発表した。

下旬：前半は梅雨前線の活動が弱く、高気圧に覆われて概ね晴れた。後半は梅雨前線が日本海まで北上し、梅雨前線に向かって暖かく湿った空気が入ったため曇りや雨の日が多かった。

#### 7月

前半に梅雨前線の活動が活発となり、各地でまとまった量の雨が降った。このため4月中旬から6月下旬まで続いた渇水状況は解消された。

上旬：期間の初めは梅雨前線の活動が活発となり大雨となったが、中頃からは梅雨前線が四国の南海上に南下したため晴間が出る日もあった。期間の終わりには、再び梅雨前線が北上して中国地方に停滞したため曇りや雨になった。

中旬：梅雨前線の影響で雨や曇りの日が多かったが、期間の終わりは高気圧に覆われて概ね晴れた。広島地方気象台は「18日ごろ、中国地方は梅雨明けしたとみられる」と発表した。

下旬：前半は高気圧に覆われて概ね晴れた。なお、台風第7号は房総半島へ上陸したため島根県への影響は小さかった。後半は前線に向かって暖かく湿った空気が入ったため曇りや雨の日が多かった。

#### 8月

上旬は高気圧に覆われて全般に晴れた日が多かったが、中旬から下旬にかけては南から暖かく湿った空気が流入したことや前線及び気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多かった。

上旬：高気圧に覆われて晴れの日が多かったが、南から暖かく湿った空気が入ったことや上空の寒気の影響で曇りや雨の日もあった。

中旬：高気圧に覆われて晴れの日もあったが、高気圧の縁を回り暖かく湿った空気が入ったため曇りの日が多かった。また、大気の状態が不安定になり雨の降る日もあった。

下旬：後半高気圧に覆われて晴れた日もあったが、前線や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多かった。

## 9月

上旬は台風や前線の影響で大雨となった。中旬から下旬の前半にかけては前線や低気圧の影響で曇りや雨の日があったが、高気圧に覆われて晴れる日が多かった。また、残暑の厳しい月であった。

上旬：中頃は台風第14号や前線の影響で西部を中心に大雨となり災害が発生した。また期間の終わりは前線の影響で雨が降った。その他の日は高気圧に覆われて概ね晴れた。

中旬：中頃は前線や低気圧の影響で曇りや雨となった。その他の日は高気圧に覆われて概ね晴れた。

下旬：前半は前線の影響で曇りや雨の日があった。後半は高気圧に覆われたが、高気圧が北に偏ったため曇った日も多かった。

## 10月

中旬には晴れの続いた日もあったが、その他の日の天気は概ね周期的に変化した。また、寒気の南下は弱く気温は高かった。

上旬：天気は周期的に変化した。3日と6日及び9日は高気圧に覆われて概ね晴れたが、その他の日は前線や気圧の谷の影響で雨や曇りの日が多かった。

中旬：前半は気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多かったが、後半は高気圧に覆われて晴れた。

下旬：中頃は高気圧に覆われて概ね晴れたが、その他の日は気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日が多かった。

## 11月

上旬と下旬の前半は、高気圧に覆われ晴れて気温の高い日が多かったが、中旬には強い寒気が南下したため気温の低い日が多く、気温の変動が大きかった。

上旬：高気圧に覆われて晴れる日が多かったが、中頃に低気圧の影響で雨となった。

中旬：期間の前半は、高気圧に覆われて晴れた日もあったが、冬型の気圧配置や寒気の影響で雨や曇りの日が多かった。

下旬：前半を中心に晴れた日もあったが、後半は気圧の谷の通過や寒気の影響で変わりやすい天気であった。

## 12月

非常に強い寒気が断続的に流れ込み、強い冬型の気圧配置の日が多かったため、山沿いを中心に12月としては記録的な大雪となった。

上旬：中頃を中心に冬型の気圧配置が強まり、雪や雨となった。その他の日も気圧の谷や寒気の影響で曇りや雨の日が多かった。

中旬：冬型の気圧配置が続いたため雪の降る日が多かった。

下旬：冬型の気圧配置や寒気の影響で雪や雨の日が多かった。期末には晴れ間も出て比較的穏やかな年末となった。

(梅原 伸)

# 水 稲

## 1 作付面積

平成17年度の水稲作付面積(子実用のみ)は20,600haで、前年に比べて200ha(1.0%)減少し、昭和45年の47%となった。これは、前年産に比べ生産目標数量の配分が減少したことや、生産農家の高齢化、労働力不足から不作付地が増加したこと、宅地等でのかい廃で田が減少したためである。

品種別にみると、うるち米では平坦部を中心に「コシヒカリ」の品質低下が続き、特に品質が悪いところでは「ハナエチゼン」や「祭り晴」の増反を推進したことや、担い手の規模拡大によって品種の分散が図られたこと、前年度の台風被害が大きかったことから、「コシヒカリ」は微減し、「ハナエチゼン」、「祭り晴」は微増した。もち米ではいずれの品種も微減し、合計でも約30haの作付け減となった。醸造用米では「神の舞」が微増した他は、いずれも微減し、全体としても約16ha減少した。以上の結果、「コシヒカリ」の作付け比率は水稲全体の80.4%となり、ここ数年に比べ2%低くなった。

また、うるち米で新しく奨励品種「きぬむすめ(西海232号)」が採用され、採種圃場も含め約19haで栽培が始まった。

表1. 水稲の品種別作付動向(島根農政事務所調べ)

種類	品種名	平12年 (ha)	平13年 (ha)	平14年 (ha)	平15年 (ha)	平16年 (ha)	平17年 (ha)	同比率 (%)
うるち	ハナエチゼン	251	660	1,134	1,192	1,240	1,334	7.0
	コシヒカリ	16,190	15,735	15,643	15,393	16,216	15,349	80.4
	ヒノヒカリ	—	—	146	153	128	189	1.0
	きぬむすめ	—	—	—	—	—	16	—
	祭り晴	1,227	1,057	1,120	1,005	973	1,073	5.6
(醸造用)	五百万石	122	113	100	97	114	107	0.6
	神の舞	42	43	32	25	24	26	0.1
	佐香錦	—	15	21	24	22	15	0.1
	改良雄町	25	22	23	20	22	18	0.1
	うるち計	19,343	18,474	18,356	18,110	18,927	18,298	95.9
もち	ヒメノモチ	403	342	293	311	408	387	2.0
	ココノエモチ	220	176	156	176	208	207	1.1
	ヤシロモチ	111	135	127	123	152	146	0.8
	もち計	851	695	614	649	813	782	4.1
合計		20,194	19,169	18,971	18,759	19,740	19,080	100.0

注)うるち計は醸造用を含む。その他品種があり、計と内訳は一致しない。

## 2 生育概況

### (1) 育苗期、田植期

育苗期間は気温が低めに推移した時期もあったが、総じて高温気味で推移し、日照時間も多く、気温変化が大きかった。また、育苗後半の4月下旬から5月初めの気温が高く、ハウス管理等によってやや軟弱徒長苗となったところがあったほか、育苗期間がやや短縮された。苗立枯病などの発生

は少なく、前年多かった苗いもちの発生はほとんど認められなかった。

「コシヒカリ」については、前年同様、乳白粒による品質低下の対策として平坦部及び中山間部の乳白粒発生地帯で5月下旬田植えを推進した。しかし、苗の生育が早まったことや前年の台風被害の程度が、遅植で顕著であったことからやや後退した。このため、県全体の田植最盛期は5月11日で昨年に比べ2日早く、平年に比べても3日早くなった。

なお、4月～6月にかけて、降水量が極端に少なく、用水の便が悪い一部の圃場では、代かきができず、作付けを断念した所や遅らせた所があった。

## (2) 活着期、分けつ期

田植後の活着・初期生育は、4月下旬から5月初めが高温で、5月中・下旬がやや低温で推移したことから、5月連休までに移植した所の活着は良好で、これ以降の所ではやや停滞した。また、初期生育もやや停滞したところが見られたが、6月以降は高温多照で推移したため、生育は順調になり、平年を上回る状況となった。草丈は概ね平年並で、茎数は多めとなり、農業技術センターの作況試験では、いずれの品種、作期とも試験開始以来最も多い最高茎数となった。6月11日に梅雨入りし、7月18日に明けたが、降雨はほんの一時期あった程度で、全体としては空梅雨傾向であった。このため生育全般としてはいずれの品種・作期とも前進化した。なお、用水の便が悪い所では水不足のため、分けつや草丈がやや抑制されたり、塩害の発生が認められた。

## (3) 幼穂形成期、出穂期

幼穂形成期から出穂期にかけての期間は、7月初めに多雨・寡照の時期があったものの、いずれの品種・作期とも高温多照で推移し、特に6月下旬、8月上旬、9月は高温傾向が強い状況であった。このため、幼穂形成期は平年に比べ1～6日早まり、県全体の出穂最盛期は平年に比べ4日早く、前年と同じの7月30日となった。なおこの間、6月の高温・多照から7月前半の多雨・寡照に急激な気象変化があったため、田植えの遅かった「コシヒカリ」や「祭り晴」等の出穂が遅い品種では、上位3、4葉目の葉身が異常に徒長した。しかし、下位節間の伸長はそれほど大きくなく、その後の天候も比較的良好であったため、倒伏に直接結びつくことは無かった。

病害虫の発生状況では、6月までの多照・寡雨によっていもち病の発生が少なく、高温気味の天候であったため紋枯病がやや多く、斑点米カメムシ類の発生も多かった。県では7月20日に斑点米カメムシ類の発生注意報を発表し、防除の徹底を呼びかけた。なお、発生が少なかったが、いもち病の検定を行ったところ、昨年に引き続きMBI-D剤の耐性菌が確認されており、県内全域に広がりがあつことが想像された。次年度以降の防除指導に当たっては注意が必要である。

また収量構成要素をみると、茎数はやや多め、穂数はほぼ平年並みに確保できたが、1穂当たり籾数は生育転換期前後の気象変動や、前年の台風被害を考慮して施肥量が少なくなったことからやや少ない状況となった。このため、面積当たり籾数も平年並みからやや少ない状況であった。

## (4) 登熟期、成熟期

登熟期間も引き続き高温傾向で推移し、成熟期も「コシヒカリ」で2日～1週間程度早まった。「ハナエチゼン」では8月8日から収穫が始まり、「コシヒカリ」の早いものでは8月20日頃に成熟期を迎えており、登熟期間もやや短縮された。このことから県全体の刈取最盛期は平年に比べ5日早い9月12日で、前年に比べても3日早くなった。なお、この間も高温・多照傾向で、台風も9月上旬に1個接近したのみで順調な登熟となったが、平坦部の「コシヒカリ」や「祭り晴」の一部で、籾が白く熟れていく現象が認められた。特に、今年から栽培の始まった「きぬむすめ」では、この現象が目立ったが、収量・品質への影響は少なかったと思われた。

収量構成要素を見ると、面積当たり籾数はやや少なくなったが、大きな気象被害や病害虫被害が無く、登熟歩合や玄米千粒重は平年並み～やや良好となった。

以上の結果、水稻作柄は10a当たり収量516kgで、作況指数は102、地帯別では出雲地帯(隠岐を含む)が102、石見地帯が101となった。

表2. 平成17年度水稻作況試験成績(農業技術センター、中山間地域研究センター)

調査項目	場所 品種 田植日	出雲 ハネチゼン 4/25		出雲 コシヒカリ 4/25		出雲 コシヒカリ 5/10		出雲 コシヒカリ 5/25		出雲 祭り晴 5/10		赤来 コシヒカリ 5/ 2	
		本年	比較	本年	比較	本年	比較	本年	比較	本年	比較	本年	比較
葉齢	田植時	2.2	-0.2	2.1	-0.1	2.4	+0.2	2.1	0.0	2.3	+0.1	2.6	+0.4
〃	20日後	5.4	+0.4	5.1	+0.6	5.1	0.0	5.8	-0.2	5.0	-0.1		
〃	30日後	6.8	+0.3	6.4	+0.5	7.0	+0.1	7.7	-0.1	6.9	0.0	6.3	-0.2
〃	40日後	8.3	+0.1	7.8	+0.3	8.8	+0.4	9.5	+0.3	8.7	+0.2	8.0	+0.1
〃	50日後	9.8	+0.2	9.2	+0.3	10.0	+0.4	10.4	+0.1	10.2	+0.4	9.8	+0.6
〃	60日後	10.7	0.0	10.2	+0.1	11.1	+0.3	11.8	+0.2	11.2	+0.2	10.8	+0.5
〃	70日後	12.4	+0.4	11.6	+0.5	12.3	+0.4	12.4	-0.3	12.0	0.0	11.8	+0.5
〃	80日後	12.5	-0.1	12.7	+0.4	12.5	-0.3			13.4	+0.2	12.7	+0.4
止葉葉位		12.5	-0.1	12.8	0.0	12.5	-0.3	12.4	-0.3	13.9	-0.2	13.0	-0.1
幼穂形成期(月/日)		6/19	-2	6/27	-1	7/ 2	-6	7/10	-5	7/15	-4	7/ 1	-6
出穂期(月/日)		7/13	-3	7/22	-2	7/29	-4	8/ 7	-1	8/11	-2	7/28	-5
成熟期(月/日)		8/13	-3	8/23	-5	9/ 4	-7	9/12	-2	9/20	-3	9/ 9	-6
草丈(cm)	田植時	12.6	104	13.5	101	14.2	106	13.0	103	12.8	108	10.1	87
〃	20日後	22.8	113	21.8	114	20.9	94	22.0	90	20.7	95		
〃	30日後	23.0	104	23.1	107	23.4	94	30.4	85	24.7	100	23.3	101
〃	40日後	25.1	89	23.6	89	38.4	107	55.9	109	37.0	109	28.2	102
〃	50日後	39.2	99	37.1	100	58.8	112	76.3	120	52.8	110	39.9	104
〃	60日後	53.4	97	50.9	98	74.0	113	85.3	113	73.9	119	58.9	111
〃	70日後	65.8	99	66.5	102	87.4	113	96.4	110	86.2	119	80.1	119
〃	80日後	81.3	103	75.1	97	101.7	112			88.4	109	93.5	120
稈長(cm)		72.3	101	80.0	98	90.9	103	93.3	107	79.0	107	90.6	105
穂長(cm)		16.4	93	18.1	91	19.8	101	19.1	100	21.5	101	20.1	106
茎数(/m <sup>2</sup> )	20日後	113	123	105	117	141	105	266	105	142	118		
〃	30日後	274	140	228	138	351	120	556	123	360	134	236	106
〃	40日後	461	128	397	123	707	144	705	139	733	164	470	126
〃	50日後	686	115	628	114	827	145	683	140	799	148	880	158
〃	60日後	675	112	647	111	790	147	635	136	762	152	884	142
〃	70日後	638	110	609	111	728	144	552	125	698	146	773	128
〃	80日後	623	116	586	114	608	132			604	140	682	117
穂数(/m <sup>2</sup> )		582	118	464	114	508	121	463	119	477	117	538	123
1穂籾数		53.3	85	62.7	84	75.8	91	79.3	102	96.6	108	80.7	98
籾数(×100/m <sup>2</sup> )		310	101	291	95	385	109	367	122	410	127	434	118
登熟歩合(%)		83.7	101	80.3	97	77.9	105	70.1	91	70.4	82	71.6	86
玄米千粒重(g)		21.0	95	22.3	99	21.5	97	21.9	97	20.9	95	22.1	95
わら重(kg/a)		60.0	102	61.2	97	80.9	113	76.5	113	102.5	115	77.7	119
精籾重(kg/a)		73.8	103	72.1	99	90.4	116	80.7	113	88.4	112	93.7	109
屑米重(kg/a)		3.9	122	4.3	130	6.4	107	7.3	132	9.3	274	6.4	179
玄米重(kg/a)		54.4	98	52.0	92	64.0	113	56.3	107	60.3	99	68.7	100

注) 比較の欄は葉齢～成熟期については平年との差、他は対比(%)。平年は前10ヶ年の平均であるが、年数が短い場合がある。

### 3 検査概況

平成17年12月2日現在の検査数量は、45,001t(前年同期41,769t、前々年同期36,772t)で前年、前々年に比べ多くなった。種類別では、うるち米42,427t(前年39,322t、前々年35,115t)、もち米1,762t(前年1,699t、前々年909t)、醸造用米812t(前年896t、前々年698t)と、天候が良く登熟が良好であったため、うるち米、もち米はやや増加したものの醸造用米は昨年と比べやや減少した。

うるち米の1等比率は66.2%(前年56.7%、前々年78.7%)で、昨年を約10ポイント上回り、平成10年以降では平成15に次ぐ高い数字となった。品種別では、作付の80%以上を占める「コシヒカリ」が66.0%(前年54.8%、前々年80.4%)で、ここ数年と同様に平坦部の等級低下が大きく、山間部との格差が大きかった。格下げの第1位理由は未熟粒、第2位は心白(乳白)粒によるものであった他、一部地域では胴割粒によるものも目立った。

乳白粒対策としては、引き続き平坦部全域と中山間地域で5月下旬田植えを推進したが、昨年、この作期が台風の影響が大きく、収穫が困難になるなど問題を残したため、全般には田植えが早まり、今後の課題を残した。しかし、温暖化による生育の前進化は顕著であり、今後とも気象温暖化を踏まえた総合的な対策を進めていく必要がある。

また、カメムシ斑点米についても、発生量が多く、気象も助長的であったことから注意報が発表され、防除の徹底を呼びかけたが、主要な品種では格落ち理由の3位までに入った。特に、これまで比較的被害の少なかった遅い品種でも被害が増加しており、今後とも重要な対策の一つとなる。

なお、最大の等級格下げ要因は「ハナエチゼン」ではカメムシ、「コシヒカリ」では未熟粒、「祭り晴」では心白粒であった。

もち米の1等比率は38.9%(前年45.7%、前々年53.9%)で、ここ数年では低い結果となった。主な格下げ要因は未熟粒、カメムシ胴割粒で、ここ数年の傾向と同様であった。

醸造用米の特等は13%程度と低く、特上は全くなかった。主な格下げ要因は未熟粒、胴割粒、カメムシであり、近年徐々に低下してきている。

表3. 平成17年産米の品種別検査概況(JA全農しまね米穀課調べ)

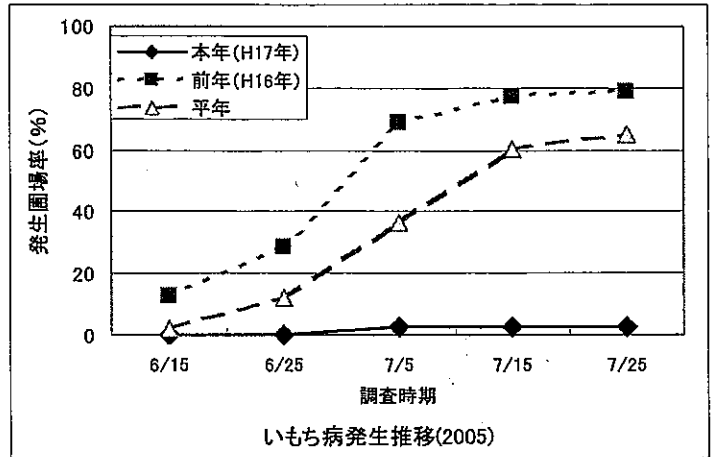
種類	品種名	検査数量 (t)	1等比率 (%)	主な等級格付要因
うるち	ハナエチゼン	4,430	79.4	カメムシ21.0
	コシヒカリ	34,576	66.0	未熟粒15.0、心白粒9.5、カメムシ7.0、胴割粒3.3
	祭り晴	2,584	47.0	心白粒19.2、カメムシ15.8、未熟粒14.1
	きむむすめ			充実度、心白粒
	うるち計	42,427	66.2	未熟粒13.0、カメムシ9.1、心白粒8.4、胴割粒2.9
もち	ヒメノモチ	956	36.7	未熟粒17.0、他着色14.1、カメムシ13.4、発芽粒7.7
	ココノエモチ	630	51.0	未熟粒38.0、カメムシ3.6、充実度3.6、胴割粒3.4
	ヤシロモチ	110	0.9	未熟粒71.5、カメムシ13.6、胴割粒9.3、他着色3.7
	もち計	1,762	38.9	未熟粒23.2、カメムシ11.6、他着色10.8、発芽粒5.6
醸造用	五百万石	502		未熟粒79.1、カメムシ12.9、胴割粒5.3
	神の舞	125		未熟粒79.1、カメムシ16.9
	佐香錦	64		未熟粒71.0、胴割粒22.6、充実度6.3
	改良雄町	79		未熟粒77.6、胴割粒22.4
	醸造用計	812		未熟粒78.4、カメムシ12.2、胴割粒6.2
合計		45,001	65.4	

注) 平成17年12月2日現在。ただし、主な等級格付け要因は9月末日の状況。合計の1等比率は醸造用の特上～1等を含めた数値。

#### 4 病害虫の発生状況

##### (1) 葉いもち

置き苗での発生は確認されず、伝染源量は少ないものと推察された。初発生は平年より遅く6月17日であった。6月の気象は、BLASTAMによる感染好適日の出現日数がのべ3日(平年値14.9日)に留まったことから、初期の病勢は極めて緩慢で、全般発生期も平年に比べて3半旬遅い7月第3半旬となった。また、7月第4半旬には平年並みに梅雨が明け、以後高温小雨傾向となったため、病勢は活発化することなく終息した。7月下旬の平均発病株率は0.5%と平年値37.4%を大きく下回り、ここ10年間で最も低く、全般の発生量も平年に比べて少なかった。MBI-D剤(ウィン、デラウス、アチーブ)耐性菌の分布が県東部を中心に拡大した。

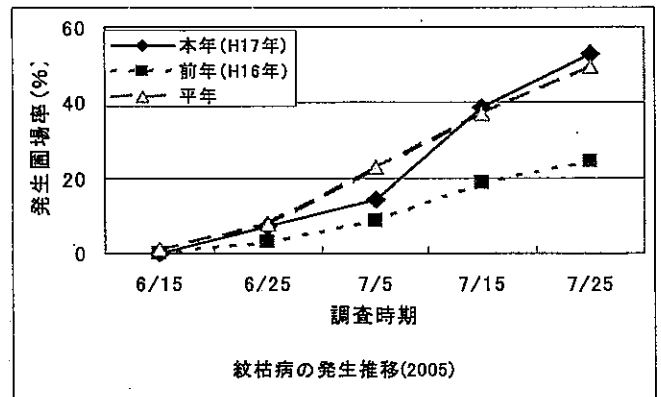


##### (2) 穂いもち

伝染源の葉いもちの発生は極めて少なく、罹病性品種のコシヒカリで僅かに発生を認めたのみで、全般の発生量は平年に比べて少なかった。

##### (3) 紋枯病

初発生は平年並みの6月14日に認められた。稲の茎数が多かったことに加えて、周期的な降雨により病勢が活発化し、7月下旬には発病程度の高い圃場もみられた。早生種では上位進展も活発で止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだが、主要品種コシヒカリでは8月下旬以降気温低下に伴って、上位進展は鈍化した。全般の発生量は平年に比べてやや多かったが、発病程度は平年並みとなった。



##### (4) ツマグロヨコバイ

第1世代成虫の発生時期は平年並であった。払い落とし調査では6月までは発生圃場率、発生量ともに平年に比べて少なかったが、7月以降は気温がやや高く推移し増殖が盛んとなった。この結果、収穫期には発生程度の高い圃場が多くなった。

##### (5) ニカメイチュウ

予察灯及びフェロモントラップにおける発蛾最盛期は、越冬世代成虫が5月中下旬、第1世代成虫が7月下旬でともに平年並みであった。誘殺数は越冬世代、第1世代成虫とも少なく、幼虫による被害も少なかった。

##### (6) セジロウンカ

予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から見られ、6~7月の飛来量は平年並みであった。これに由来する幼虫は7月下旬から発生し、発生量はほぼ平年並みであった。

(7) トビイロウンカ

予察灯での初飛来は7月第3半旬に見られ、飛来量は平年に比べてやや多かった。これに由来する幼虫は8月上旬から発生し、発生量はほぼ平年並みであった。収穫期に成幼虫密度が高い圃場が一部で見られた。

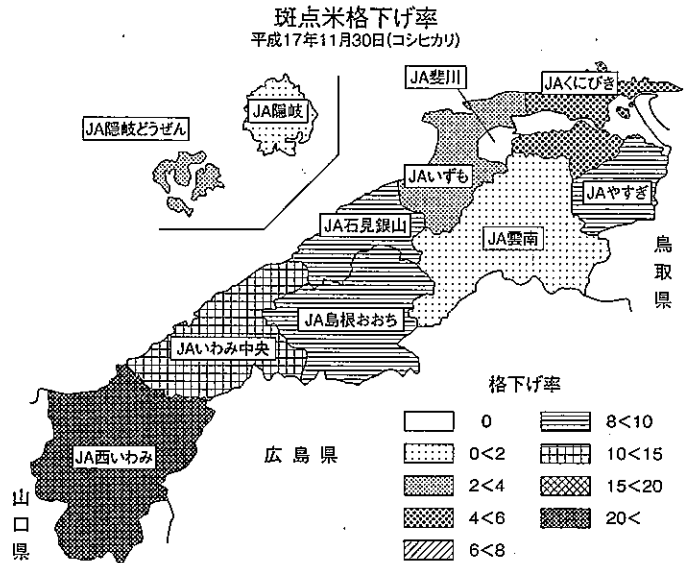
(8) コブノメイガ

予察灯での飛来時期、飛来量ともに平年並みで、次世代の発蛾盛期は8月第2半旬であった。被害株率、発生圃場率はほぼ平年並みであった。次世代発蛾盛期には、大部分の水稻は出穂しており、その後の被害発生は少なかった。

(9) 斑点米カメムシ類

畦畔雑草すくい取り(6月下旬)、極早生品種出穂時(7月下旬)、コシヒカリ出穂時(8月上旬)の調査では、平年に比べてやや多い発生であった(7月20日付け注意報)。主な発生種はアカスジカスミカメ、ホソハリカメムシで、本年はクモヘリカメムシの発生が早い時期から認められた。

17年産米の斑点米混入による格下げは、コシヒカリでは未熟粒、心白粒に次いで第3位、ハナエチゼンでは第1位であった。格下げ率はコシヒカリでは7.0%、ハナエチゼンは19.9%である(11月30日現在)。



(10) イネドロオイムシ

5月下旬における本虫の被害は平年に比べて少なかった。6月下旬には山間部を中心に発生圃場が認められた。

(1-1) イネツトムシ

第2世代幼虫による被害がやや多かった。特に、葉色が濃い晩生品種の圃場に加害が集中し、特別栽培米圃場の一部では被害が多発生した。

(狩野 直・板垣紀夫)

## 麦 類

### 1 生育期間における気象上の特徴 (出雲市)

生育中期の12月後半から3月中旬頃までは気温は平年並かやや低く、日照時間も平年並かやや少なめに推移したが、生育初期の11月から12月前半にかけてと出穂直前の3月下旬以降は高温多照であった。降水量は12月に多かったがそれ以外は概ね平年並かやや少なめに推移した。

### 2 生育状況

播種後、高温気味に推移し天候も良かったため、発芽苗立ちは比較的良いところが多く、生育もかなり進んだ。しかし、12月後半からは気温が急激に低下し、平年並かやや低めに推移したため、概ね平年並の出穂期となった。出穂後は気温の低い時期もあったが高温気味で日照時間も多かったため、成熟期はやや早まった。穂数は播種時期や初期生育の良否によって差があるが概ね平年並となった。

湿害、病害虫等の発生は少なかったが、二条大麦の出穂の早かった圃場で低温による不稔穂の発生が認められた。病害が少なく、登熟条件が良かったことから小麦、大麦とも収量および品質は、良かった。

### 3 作付面積および作柄概況 (六条大麦、裸麦を除く子実用)

	年産	作付面積 (ha)			収穫量 (t)			収量 (kg/10a)		
		田	畑	計	田	畑	計	田	畑	平均
小麦	2003	116	11	127	237	18	255	204	167	201
	2004	95	7	102	213	16	229	224	230	225
	2005	91	6	97	207	13	220	227	230	227
二条大麦	2003	443	2	445	830	2	832	187	120	187
	2004	395	0	395	1,220	0	1,220	310	290	310
	2005	367	0	367	1,320	0	1,320	359	260	359
4麦類計	2003	559	14	573	1,070	21	1,090			
	2004	490	8	498	1,430	18	1,450			
	2005	459	6	465	1,530	13	1,540			

注) 松江統計・情報センター調査

### 4 検査状況

	年産	検査数量 (t)	等級比率 (%)		
			1等	2等	規格外
小麦	2003	233	3.9	96.1	—
	2004	205	3.0	81.1	15.9
	2005	199	100	—	—
ビール麦	2003	280	—	100	
	2004	350	—	100	
	2005	350	14.3	85.7	
普通大粒大麦	2003	550	58.2	41.7	0.1
	2004	873	97.4	1.7	0.9
	2005	958	99.5	—	0.5

注) 島根農政事務所調査

5 平成17年産麦作況試験成績(島根県農業試験場)

(1) 栽培方法の概要

- ア 場所：出雲市芦渡町(標高20m)、土壌：細粒質山地黄色土、粘質
- イ 品種：小麦「農林61号」、二条大麦「あまぎ二条」
- ウ 播種：2004年11月8日 小麦300粒/m<sup>2</sup> 二条大麦200粒/m<sup>2</sup> 条間25cmドリル播
- エ 施肥：窒素 0.9kg/a [基肥0.5kg/a、追肥0.4kg/a(1/19、2/22施用)]  
リン酸 1.2kg/a、カリ 1.2kg/a

(2) 調査結果(島根県農業技術センター)

調査項目	播種後日数	農林61号				あまぎ二条			
		前年	本年	平年	比較	前年	本年	平年	比較
葉齡	45日	3.8	4.6	3.4	+1.2	4.5	5.5	4.0	+1.5
〃	75日	5.4	5.5	5.0	+0.5	6.7	6.6	5.9	+0.7
〃	105日	6.5	6.5	6.1	+0.4	8.1	8.5	7.6	+0.9
〃	135日	8.3	8.3	8.0	+0.3	11.6	11.6	10.7	+0.9
出穂期(月/日)		4/15	4/19	4/18	+1	4/05	4/08	4/10	-2
成熟期(月/日)		6/04	6/07	6/09	-2	5/18	5/21	5/24	-3
草丈(cm)	45日	15.0	20.0	13.8	145	11.6	14.7	10.5	140
〃	75日	20.1	24.6	19.4	127	14.1	16.0	14.4	111
〃	105日	25.8	31.2	26.3	119	18.4	18.6	19.0	98
〃	135日	42.6	46.5	49.2	95	39.6	39.0	43.3	90
幼穂長(mm)	75日	1.5	1.1	0.8	150	2.1	2.3	1.2	187
〃	105日	2.4	2.2	2.1	105	3.4	5.0	3.3	144
〃	135日	12.9	8.5	10.6	80	35.7	31.6	29.1	109
節間長(cm)	75日	0.6	—	0.3	—	0.3	—	0.1	—
〃	105日	2.3	2.3	2.9	82	1.2	3.4	1.9	168
〃	135日	13.8	14.6	14.5	101	18.0	20.9	21.7	96
稈長(cm)		84.0	93.6	94.2	99	87.1	84.0	93.7	90
穂長(cm)		7.1	7.8	8.3	94	5.6	5.4	5.9	92
出芽数(本/m <sup>2</sup> )		243	230	246	94	177	159	216	74
茎数(本/m <sup>2</sup> )	45日	708	974	468	208	551	1087	567	192
〃	75日	931	1229	852	144	1157	1314	1156	114
〃	105日	845	1200	1053	114	1176	1561	1408	111
〃	135日	747	941	967	97	876	961	1231	78
穂数(本/m <sup>2</sup> )		639	621	743	84	747	683	931	73
子実千粒重(g)		34.4	39.9	37.0	108	47.4	39.6	40.9	97
子実収量(kg/10a)		379	619	500	124	372	357	468	76
外観品質		3	2			4	3		
検査等級		2等	1等			2等	2等		

注1) 平年は前10カ年平均。比較の欄は葉齡については平年との差、他は平年対比(%)を示す。

注2) 幼穂長および節間長の平年は前9カ年の平均を示す。

注3) 外観品質は1(上の上)~6(下)。注4) 「あまぎ二条」の検査等級はビール大麦規格。

6 病害虫の発生状況

(1) 赤かび病

出穂期以降降雨がやや少なく、主要品種のアサカゴールドでは巡回調査において発生が確認されず、全般の発生量は平年に比べて少なかった。(橋本 忍・板垣紀夫)

# 大豆

## 1 平成17年度大豆作況試験成績

### (1) 栽培方法の概要

場所: 出雲市芦渡町農業技術センター所内普通畑(標高20m) 土壌: 細粒質山地黄色土、粘質  
 播種期: 6月8日 栽植密度: 12.5本/m<sup>2</sup>  
 施肥: 基肥 窒素3kg/10a(硫安)、リン酸8kg/10a、カリ8kg/10a

### (2) 調査結果の概要

調査項目	タマホマレ				サチユタカ			
	本年	昨年	平年	比較	本年	昨年	平年	比較
主茎節数 30日後	7.8	7.9	6.4	+1.4	7.7	8.1	7.1	+0.6
〃 40日後	11.8	12.5	9.5	+2.3	11.5	12.3	10.8	+0.7
〃 50日後	14.9	15.5	12.9	+2.0	14.5	15.6	14.3	+0.2
〃 60日後	17.5	16.0	14.8	+2.7	16.9	16.6	16.5	+0.4
〃 成熟時	16.9	16.0	15.0	+1.9	16.4	16.6	16.5	-0.1
開花期(月/日)	7/23	7/23	7/28	-5	7/26	7/26	7/30	-4
成熟期(月/日)	10/29	10/31	10/31	-2	10/27	10/26	10/26	+1
主茎長(cm) 30日後	24.5	21.8	19.6	125	17.7	18.0	18.1	98
〃 40日後	47.0	50.0	34.1	138	36.6	40.2	34.5	106
〃 50日後	59.4	70.4	50.6	117	48.7	60.9	51.5	95
〃 60日後	71.0	73.9	60.3	118	63.0	70.6	65.2	97
〃 成熟時	72.1	74.4	62.7	115	65.9	71.5	67.1	98
個体分枝数 30日後	0.0	1.6	0.6	-0.6	0.0	1.0	0.6	-0.6
〃 40日後	1.6	3.1	1.8	-0.2	0.4	2.8	1.9	-1.5
〃 50日後	3.9	3.8	3.2	+0.7	2.1	2.8	2.5	-0.4
〃 60日後	4.5	4.2	3.9	+0.6	2.8	3.1	3.2	-0.4
〃 成熟時	5.4	7.1	5.5	-0.1	5.0	6.4	5.3	-0.3
全重(kg/10a)	709	597	692	102	711	586	720	99
子実百粒重(g)	27.5	28.4	28.6	96	33.1	32.1	34.5	96
子実収量(kg/10a)	247	190	312	79	322	234	358	90
外観品質	3	4			3	4		
検査等級	2上	2下			2上	2中		

注1) 平年: 「タマホマレ」は前10カ年の平均、「サチユタカ」は前5カ年の平均値。

注2) 比較: 主茎節数、開花期、成熟期、個体分枝数については平年との差、他は平年対比(%)。

注3) 外観品質は1: 上上、2: 上中、3: 上下、4: 中上、5: 中中、6: 中下、7: 下の7段階。検査等級は島根農政事務所による。

### (3) 気象及び生育概況

播種後、気温は高く降水量が少なかったため、出芽はやや遅れた。出芽後も晴天が続き気温は高かったが、7月1日以降は一転して曇天または雨天の日が多く、降水量も多くなった。大豆の生育は、始め6月の晴天の影響で主茎節数が多く、主茎長は短かったが、7月1日以降の曇雨天の影響で徒長し、主茎長が長く、分枝の発生は少なかった。

7月18日頃梅雨明けとなり、その後晴れる日が多くなり、日照時間も回復したため、主茎の伸長はやや鈍り、分枝

数は増加した。初期生育が進んだため、開花期は平年に比べ4～5日早かった。

開花期以降、8月中旬頃までは適度な降雨があったが、8月下旬以降は気温が高く、降水量が少なく、日照時間が多く推移した。このため、成熟期も平年並～2日程度早まった。成熟時の主茎節数は両品種ともやや多く、主茎長は「タマホマレ」では長く「サチユタカ」ではやや短かった。また分枝数は「タマホマレ」では平年並で「サチユタカ」ではやや少なかった。個体着莢節数は平年並～やや多く、個体稔実莢数は若干少なかったものの個体子実粒数はやや多かった。しかし、8月下旬以降の少雨傾向の影響で子実の肥大が悪く子実百粒重が小さかったため、子実収量は少なくなった。

品質は昨年よりは向上したが、「タマホマレ」では未熟粒、また「サチユタカ」では裂皮粒が品質低下の要因となった。

## 2 作付面積及び収穫量

県内の大豆作付面積は前年並みであった。しかし、10a収量が低く、前年より多少向上したものの、平均収量対比75%で、3年連続の不作となった。主な減収の要因は、生育初期の湿害、台風による倒伏、10月上中旬の霜害、降雪による収穫放棄などであると推察される。

表2. 大豆の田畑別作付面積及び収穫量

年	計				田			畑		
	面積 (ha)	10a収 量 (kg)	収 穫 量 (t)	平均収 量対比	面積 (ha)	10a収 量 (kg)	収 穫 量 (t)	面積 (ha)	10a収 量 (kg)	収 穫 量 (t)
1998	1,260	138	1,740	98	1,010	139	1,410	248	132	327
1999	1,220	138	1,680	101	987	139	1,370	237	132	312
2000	1,290	149	1,920	109	1,060	153	1,620	233	128	299
2001	1,370	156	2,140	111	1,140	159	1,810	229	145	332
2002	1,410	156	2,200	109	1,180	158	1,870	225	144	325
2003	1,390	109	1,520	75	1,170	109	1,280	219	111	243
2004	1,240	86	1,070	60	1,000	84	840	238	95	226
2005	1,240	104	1,290	75	1,010	105	1,060	233	100	232

注) 島根農政事務所調べ。平均収量対比とは、10a当たり平均収量(過去7か年のうち、最高、最低を除いた5か年の平均値)と当年産の10a当たり収量との対比である。

## 3 検査概況

品質も全般に良くなく、1等比率は7.4%と低かった。主な格下げ理由は未熟粒、汚損粒であった。

表3. 平成17年産大豆の検査成績

種類	検査数量 kg	1等 %	2等 %	3等 %	規 格 外 %	合 格 %	主な格下げ理由 %
普通大豆	253,950	7.4	30.0	58.6	4.0		未熟52.6、汚損3 3.2
特定加工用大豆	161,250					100.0	
種子	6,360					100.0	
合計	421,560						

注) 島根農政事務所調べ(平成18年3月31日現在)

#### 4 病害虫の発生状況

##### (1) ハスモンヨトウ

フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は多く、圃場での白変葉の発生はやや早い8月上旬から認められた。その後も飛来が続き、9月末には平年の1.2~2.0倍となった。

8月末の白変葉数はやや多く、全般の発生量はやや多かった(9月1日付け注意報)。

(山口裕司・板垣紀夫)

## 野菜

### 1 メロン

アムスメロンは、年明けから2月まで気温が低めに推移したため、早期作型では地温上昇の遅れなどにより定植時期をずらしたほ場もあるなど、生育は平年より7日程度遅くなった。4月に入り気温は高めで日照時間は多くなり生育は順調となったが、高温乾燥傾向のため交配前に水不足気味となったほ場もあった。初出荷は5月25日で6月20日頃に出荷ピークとなった。玉サイズは玉肥大期が高温傾向で推移したため、4・5L玉中心の大玉傾向となった。また、5月～6月が高温多日照で天候が安定し根張りも良く、ネットは密に発生し良好となったが、生育後半の草勢が衰えず乾燥傾向で果皮が硬化したことなどにより、6月出荷において収穫前の裂果が多発した。

夏作アールスメロンは、定植時から6月末まで好天となり順調に生育した。7月に入り中旬まで曇雨天が続いたが糖度上昇、ネット形成も良好であった。

秋作アールスメロンは、定植後から高温・乾燥が続き、初期生育において軽いしおれやハウス中央部の生育抑制が見られ、結果枝の伸長不良や黄化葉症が発生したほ場もあった。その後は、台風の影響も少なく9月以降の高温多日照条件もあり、ネット形成、糖度上昇は概ね良好であった。

### 2 青ねぎ、ほうれんそう

青ねぎは、出雲地域、雲南地域を中心に生産されており、近年栽培面積が増加している。

本年は、夏場の高温で一部で葉先枯れ等の症状が発生し収量がやや伸び悩んだが、概ね順調な生育であった。また、12月以降の低温で生育が大きく遅れた。

ほうれんそうは、県内各地で生産されているが、夏期高温で中山間地の収量が伸び悩んだが台風等の大きな被害もなく概ね順調な生育であった。

表1 平成16年産青ねぎ、ほうれんそう生産・販売実績（JA全農島根県本部資料）

品目	出荷量 トン	販売金額 千円	単価 円/kg	前年対比(%)		
				出荷量	金額	単価
青ねぎ (4～2月)	257	164,473	640	97	89	92
ほうれんそう (4～2月)	89	61,156	690	98	95	95

### 3 なす、ピーマン、いんげん

なす、ピーマン、いんげんについては、中山間地を中心に栽培がおこなわれている。これらの品目は、露地野菜でありながら比較的高収益である特徴がある。ただし、労働集約的な面もあるため、近年は生産者の高齢化の影響を受け面積的には伸び悩んでいる。

平成17年の生産概要は栽培期間中は天候に恵まれ単位収量は高かったが、生産者の減少により出荷量は前年並みであった。豊作傾向で販売単価は前年を下回ったため販売金額は前年を下回った。

表2 平成17年産なす、ピーマン、いんげん生産・販売実績（4～1月）（JA全農島根県本部資料）

品目	出荷量 トン	販売金額 千円	単価 円/kg	前年対比(%)		
				出荷量	金額	単価
なす	289	56,573	196	104	92	89
ピーマン	92	24,631	267	95	89	94
いんげん	18	13,199	719	100	92	92

#### 4 たまねぎ

たまねぎは国の指定産地である斐川町、益田市等平坦部を中心に栽培が行われているが、栽培面積は生産者の高齢化、規模縮小、担い手の減少や輸入量増加に伴う価格低迷等により、年々減少している。

平成17年産の栽培状況は、定植から春までは順調な生育であったが、5月以降の玉肥大初期から小雨傾向が続き小玉傾向となった。収穫期は比較的天候に恵まれ地乾しはできたが、貯蔵中の気温が平年より高く黒かび病が多発し、規格外品の割合が増加した。以上の要因で本年の出荷量は前年を大きく下回った。

表3 平成17年産たまねぎ生産・販売実績（4～2月）（JA全農島根県本部資料）

年度	栽培面積 ha	出荷量 トン	販売金額 千円	単価 円/kg	収量 kg/10a	前年対比(%)			
						面積	出荷量	金額	単価
17年	37.2	1,416	120,946	85.4	3,806	82	79	69	87
16年	45.3	1,783	175,505	98.4	3,935	87	93	97	105

#### 5 キャベツ

春～初夏取りの作型では、年明けの低温の影響から生育が停滞気味となったため出荷が遅れ、量が不足した。4月からは好天が続いたことから生育が旺盛になり、5月下旬～6月にかけて一斉に収穫期に入った。5月中旬からの小雨傾向によって小球化やカルシウム欠乏症の懸念があったが、被害の発生には至らず、6月以降は潤沢な出回りとなったため、出荷量は増加し、一方単価は下落した。なお、前年に定植した作型では定植後の湿害の影響で出荷量は前年を下回った。

夏作では、天候に恵まれ、育苗や定植作業は順調にすすんだ。5～6月の高温、小雨は害虫の発生やカルシウム欠乏などの障害を助長する条件であったが目立った被害はなかった。8月下旬の降雨や9月の台風14号は、株腐病、黒腐病、菌核病などの発生を助長したものの、概ね平年並みの収穫量が確保された。

平成17年作秋冬作では、一部害虫（ハスモンヨトウ）の被害は発生したものの安定した気候によって年内の作型は順調な生育で概ね計画的な出荷がおこなわれた。しかし、12月中旬の低温と積雪によって生育が停滞し、その後の生育は大幅に遅れることとなった。

表4 平成17年度キャベツ出荷・販売実績（4～1月末）（JA全農島根県本部資料）

年度	出荷量 トン	販売金額 千円	単価 円/kg	前年対比(%)		
				出荷量	金額	単価
17年	1,961	146,638	75	137	101	74
16年	1,437	145,326	101	—	—	—

6 病害虫の発生状況

(1) 夏秋キャベツ

ア 黒腐病

多発生圃場も散見されたが、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。

イ ハスモンヨトウ

フェロモントラップによる雄成虫の誘殺数は7月まで累積誘殺数が多く、その後も飛来が続き、9月末には平年の1.2～2.0倍となった。圃場での幼虫の発生は定植直後からみられ、発生量は全般にやや多かった（9月1日付け注意報）。

(2) タマネギ

ア ベと病

3月下旬の越年罹病株の発生圃場率は平年に比べて高かった。4～5月の気象は必ずしも助長的ではなかったが、全般の発生量は平年に比べて多くなった。

(3) 春夏作メロン

ア ベと病

5、6月の巡回調査では本病の発生を確認していない。

イ アブラムシ類

5月から発生が見られた。発生量は初期にはやや多かったが、全般の発生量はやや少なかった。

ウ ハダニ類

5月から発生が見られ、全般の発生量はやや多かった。

(4) トマト

ア 黄化萎縮病

益田市の施設栽培トマトで7月下旬に発生を初確認した（9月9日付け特殊報）。

（角 治夫・山本晃二・松本修司・石川真治・板垣紀夫）

## 花 き

### 1 気象と花き全般の生育概要

本年の気温は、1月から3月までは、平年値よりやや低めに推移した。平坦部では、これら低温の影響は比較的少なかったが、中山間地域でこの時期に定植した品目では、活着の遅れ、生育の遅れが生じ、収穫時まで影響した。4月、5月、6月は、降水量が極めて少なく、露地切り花を中心に、活着不良、生育抑制等の影響が見られた。一方、施設栽培では、日照時間が多かったことはプラス要因であった。7月上旬の大雨、日照不足は、露地切り花、施設切り花ともに、湛水による根腐れや、軟弱徒長による生育障害の発生を助長した。8月から10月の気温は平年より高く推移し、高温による品質低下や、開花の遅延および促進等による出荷期への影響が大きかった。12月中旬の低温、大雪により、中山間地域を中心に、施設の損壊等の大きな被害を受け、H18年度作付計画の変更を余儀なくされる状況となった。また、ストック等の品目では、花芽発達時の低温遭遇により奇形花等の発生がみられ、切り花品質の低下が見られた。

### 2 キ ク

#### (1) 夏秋ギク

本年は4月から気温的にはやや高めに推移したが、8～10月は残暑が厳しい年となった。このように、気温が高温で推移した結果、盆、秋彼岸など夏場の花の開花遅延が見られ計画生産に苦慮した年となった。また、降水量は6月下旬までは少なかったが、7月上旬からの大雨により根腐れが発生し、特に小ギク他の露地ギクで品質、出荷量が低下した。

このため、盆前の高値に対し盆後の価格低迷は経営に影響する結果となったと思われる。小ギクを含めた夏秋ギクでは従来から開花が気象に影響を受ける面が多いが、県内主要産地で取り組まれる電照栽培等の開花調節技術を多くの生産者が積極的に導入し、生産、経営の安定を図る必要がある。

病害虫は、高温乾燥条件下でダニ、スリップスの発生、被害が多かった。一方、キクの重要病害である白さび病の発生は少なかった。

品種は主要産地の安来地方、また、出雲地方において、白ギクは「岩の白扇」が定着する他、「フローラル優花」「秀馬」などの新品种が生産された。また、黄ギクでは主力の「サマーイエロー」と半芽なしギクである「精の輝」の栽培が定着した。

近年、「精雲」から「岩の白扇」へ品種が転換したことを契機にして多くの品種が導入、栽培される結果となっており、品種特性の解明とその特性を踏まえた栽培高位平準化が重要になってきている。

また、小ギクは近年生産が拡大している品目であり、特に雲南地方での生産拡大がめざましく、選花場の活用による共選共販体制で県外市場にも積極的に出荷されている。また、出雲地域では既存選花場の活用拡大から新たにスプレーギク・小ギクの産地化に向けての取り組みが進められており、今後の進展を期待したい。

#### (2) 秋ギク

8～10月にかけて、長期間にわたって猛暑、残暑が続いたが、秋ギクではこの期間、季咲きから半電照、年末作型の栽培期間にあたり栽培管理に苦慮した。特に、育苗期の苗腐れと定植～生育期の活着不良、それに伴う生育不良が多く発生した。

また、12月以降、一転して低温と寡日照が続き、年末栽培の開花が遅れる結果となった。

さらに、原油価格高騰等から重油、灯油などの加温経費が上昇し、花き経営を圧迫する状況となっている。この傾向は当面続くと考えられ、施設の保温対策、低温栽培品種の導入、新たな栽培方法の開発など省エネ対策を図る必要がある。

こうした状況の中、品種は白ギク「神馬」が出雲、安来地方など主要産地で主力品種として定着したが、低温開花性の「神馬2号」の導入の動きもある。また、省力栽培を目指して芽なし性品種の導入が検討されている。夏秋ギク同様、これら新品种の導入に当たっては、特性の把握に努めるとともにその特性を踏まえた栽培が必要である。

なお、農業技術センター、各農林振興センターでは普及員調査研究課題として、これら課題に鋭意取り組んでおり、現場への効果的普及を図っていく。

### 3 バラ

本年春季は気温的にはやや高めに推移したこともあり順調な生育であった。一方、市況は春3月の卒業式、送別会、4月の入学・入社式、5月の母の日、6月父の日などの需要があるものの単価安で推移する結果となった。また、夏季は猛暑で花咲きが早く、花持ちも悪かった。秋季も残暑が続いたがブライダル需要等により価格は持ち直した。近年、バラは年間を通じて単価安で推移する傾向がある。この要因としては、花の多様化が進む中、従来の品種、花型、色、フォーメーションでは消費者を満足させることができなくなった結果と考えられ、バラのスプレー系や新品种など特定の品種のみが高単価となっている。加えて、海外からの輸入が増加しており、この対策も急務となっている。

また、今年の生産では原油高により加温経費高騰などもあり経営的に厳しい状況となっている。生産者は作型の変更や加温温度を下げたりして対応しているが、品質、出荷量の低下や時期的な出荷量の増減などが懸念される。

こうした中、浜田市、益田市他ではバラが産地化され県外でも高い評価を受けている。また、近年、後継者の新規就農も見られ、今後の担い手として期待されている。一方、バラは同一圃場で長い期間、周年に渡って栽培するため、土壌や養液の管理がポイントになる。このことをしっかり踏まえ栽培と経営の安定に取り組むことが肝要である。

また、近年、高鮮度輸送についての認識が高まってきている。特に、浜田市、益田市他ではこの新たな取り組みについて積極的に検討し、「ダンボール湿式輸送」が試みられている。また、今後、「ELFシステム」での輸送についても調査、研究し、高品質バラの提供による経営安定につなげなければならない。このためにも、関係者の連携と個々の経営戦略をしっかりと持つことが重要となってきている。

### 4 トルコギキョウ

県内におけるトルコギキョウの生産は、平坦部ではF1品種の6～9月出し、県オリジナル品種の7～8月出し、中山間地域では、F1品種の7～10月出し、県オリジナル品種の8～10月出しが行われている。

県オリジナル品種は、関係機関の生産推進活動によって、本年度は8品種で27万粒の種子が10箇所の生産組織に配付され、栽培された。4月から6月までは日照量も多く順調な生育であったが、6月下旬の高温に引き続く7月上旬の大雨、日照不足により、茎葉が軟弱となり葉先枯れ症が多発した。その後の生育は順調でほぼ計画どおりの出荷となった。販売については、約4割を近畿、中国の県外市場に出荷し、出荷初めの7月中旬は、高単価でスタートした。その後も盆までは、堅調な市況であったが、盆明けからは、キク等の荷のダブリから厳しい状況が続いたが、彼岸前には回復し、全体的にはまずまずの販売状況であった。本年は、濃赤色の八重の新品种「島茜」の出荷が始まり、高い評価を得た結果、他のオリジナル品種への相乗効

果も見られた。有利販売のためのには、オリジナル性の高い品種の育成が非常に重要であることを再認識した年であった。

F1品種については、多くが中山間地域で栽培されているが、本年からは、平坦部でも種子低温処理による9～10月出し栽培が始まった。中山間地域の6月出し栽培については、3～5月の低温により、活着、生育、開花等の遅れが顕著で、出荷が7月にずれ込み、また、秋出し栽培については、8、9月の高温により、開花が早まり、草丈の不足等の品質低下も見られ、出荷の前倒しが進んだ。また、7月上旬の天候不順により、八重系の一部品種では、花卉基部が水浸状になるなどの障害が発生した。平坦部の種子低温処理による秋出し栽培については、ロゼットの発生も少なく、順調な生育であった。市況については、10月上旬以降、堅調に推移し、秋出し栽培の優位性が検証された。

今後は、有利販売が可能な県オリジナル品種及びF1品種の秋出し栽培を2本柱とした生産振興を図るとともに、実需者ニーズの掌握等のマーケティング活動を強化し、買ってもらえる島根のトルコギキョウを目指す必要がある。

害虫については、高い気温が影響し、近年同様にアザミウマ類、ヨトウ類、タバコガ類等の発生が多かったが、ヨトウ類、タバコガ類については、黄色蛍光灯の普及により被害が軽減された。

## 5 シクラメン

本県は西日本有数のシクラメン生産県となっており、鉢花経営の基幹品目として他の鉢、苗物などを加えた輪作体系で経営が展開されている。

17年産のシクラメンは、夏季の猛暑と初秋の残暑の影響を受け、花梗の伸長、花蕾の発達が抑えられたため、開花の遅れが各鉢サイズで見られた。これは島根県に限らず全国的にも同様の傾向で、特に需要の最も大きい12月出荷では市場で荷がだぶつき、市場価格低迷の要因にもつながった。近年は、5寸鉢だけでなく、ガーデニングシクラメンやF1品種を活用した小鉢等との体系で9月～12月までの継続出荷作型をとっているが、9～10月出荷予定分の開花遅延はその後の出荷作業の集中化等商品管理にも大きく影響するだけに、各鉢サイズの生産量や品種構成、栽培環境の改善、花芽発達を促す肥培管理等の対策が必要となっている。

また、17年産では高品質化を追求し過ぎた肥料の追い込み等の影響で「株の肥大によるしおれ株の発生」が多発した。最終仕上げ鉢への定植は、根量や根域の確保を目的として比較的温度が低い梅雨期の6月に行っているが、6月中旬からの高温により根の発達が例年に比べ抑制されたこともステージ別生育調査で確認され、地上部と地下部の水分収支バランスを崩すしおれ症発生の一要因となった。しおれ症の発生は全国的な課題となっているが、県産シクラメンの評価、個別経営体の収益性にも大きく影響することから、高温条件下における鉢内環境の改善、株サイズを含めた肥培管理の改善の取り組みを検討・検証し、安定生産の確立につなげていく具体的な対策を推進していく必要がある。

病害虫は、高温乾燥条件下でダニ、スリップスの発生、秋期には炭疽病・萎凋病の被害が例年に比べやや多く、シクラメンの重要病害である葉腐細菌病の発生は比較的少なかった。

(稲村博子・川村 通・石井満彦)

## 果 樹

1月から3月までは、周期的に冬型の気圧配置となり、一時的に強い寒波や大雪に見舞われるなど、雨や雪の日が多く気温は低く、日照時間は少なかった。

4月から6月までは一転して移動性高気圧に覆われて晴天の日が多く、特に梅雨前線の活動は弱く、6月の降水量は平年値の10%以下と少なかった。7月に入って梅雨前線が活発となり、ブドウでは、デラウェアの無加温栽培や巨峰の準加温栽培の一部で裂果が発生した。8月から9月については、気温はかなり高く経過し、降水量も平年より少なかったことから、カキやクリでは小玉の割合が平年よりやや高かった。

### 1 生育状況

#### (1) ブドウ

##### ア デラウェア

超早期加温栽培は、11月から12月の高温により発芽に必要な低温遭遇時間が少なかった。また、石油価格が高騰したことから加温開始時期が遅く、温度設定もやや低めの園が多かった。冬季の気象条件が低温寡日照であったことから、発芽の不揃いや生育の遅延が見られ、特に1月上旬加温開始の作型でその傾向が著しかった。

3月中旬から下旬にかけて1回目のGA処理を行った園の中には、処理時の天候が悪く、一部花振るいをした園もあった。

超早期加温栽培の出荷は4月下旬から始まったが、冬季の低温寡日照や降水量が少なかったことなどが影響し、生育の遅れや果粒の肥大不足がみられ、2L以上の規格品が少なく、パック率も高く、収量も低かった。この傾向は、6月出荷の普通加温栽培まで続いた。

なお、5月の天候が良かったことから、果実は着色先行型となり、早穫りした園はやや酸味が強かった。

無加温栽培は梅雨前線の活動が活発となり、降雨の影響を強く受け、裂果が多発し、園によっては著しい被害がみられた。

##### イ 巨峰とその他の品種

4月以降、天候に恵まれたことから、有核栽培の巨峰では花振るいが少なく、着果状態も良かった。しかし、着色期の降雨、高温が影響し裂果や着色不良による品質低下がみられた。無核栽培ピオーネについては、GA処理後の花穂長が長く、大房になりすぎ、収量が増加したため、やや着色が劣った。

第1表 デラウェア（作型別）及び大粒系ぶどうの栽培状況 単位：a、%

作型	平成17年度	平成16年度	前年比
加 温	超早期	3, 203	87
	早期	6, 888	98
	普通	7, 848	99
	準	1, 304	85
	(計)	19, 243	96
無加温	4, 724	4, 982	95
露地	736	758	97
大粒系	2, 970	3, 057	97
合計	27, 673	28, 933	96

\* J A全農島根県本部資料より

## (2) かき

発芽は平年並、着蕾状況は平年並み～やや多かった。晩霜害などの気象災害は無かったが、早生西条での発芽不良樹の発生が多かった。

6月末までの乾燥と9月の雨が少なかったことから、果実肥大がやや劣り、出荷前半を中心に小玉の割合が平年より高くなった。かん水を適宜実施した園地では比較的順調に肥大しており、かん水の重要性を再認識させられた年となった。

近年、果実の糖度不足が問題となっているが、本年も秋の好天にもかかわらず低糖度果実の混入が見られ、全体の評価を下げる結果となった。樹上軟果の発生は少なかったが、収穫後の軟果についての苦情が寄せられ、価格形成の阻害要因となった。栽培管理や収穫後の果実の取り扱い方法によってその後の日持ちが大きく左右されるので、収穫した果実を乾燥させないような商品管理が大切である。

病害は、乾燥・好天の時期があったため比較的発生が少なかったが、産地によってうどんこ病、落葉病が散見された。県西部の産地においては黒点病の発生も見られた。平成16年に多発した炭そ病は発生が少なかったが、園地によっては前年から越冬した菌の密度が多かったためか、秋の好天にもかかわらず若干の発生が認められた。害虫ではカキサビダニ、スリップス類といった微小害虫の被害が多発した。また、近年増加しているカイガラムシ類も発生が問題となった。平成16年に多発したカメムシ類は、発生予察のデータ等を見ても柿園への飛来は少なかったが、9月に若干の飛来があり、一部の産地で遅い時期の加害が認められた。

## (3) なし

### ア 二十世紀

4月の人工授粉時は好天が続き、気温も平年に比べ高かったため、結実は良好であった。その後も好天に恵まれ順調に生育し、6月はむしろ渇水気味で果実肥大不良が心配されたが、7月以降に適度な降雨があり、持ち直すことができた。

夏季には台風が襲来したが、前年に比べると上陸回数が少なく、全体的に被害は少なかった。

好天に恵まれたため病害は少なかったが、シンクイムシが地域により多発するなど、全般に虫害の発生は多かった。

### イ その他のなし

近年は暖冬により品種別の開花時期がずれ、ミツバチ授粉の園では幸水が着果不良となることがあったが、本年は平年並みの時期に揃って開花し、好天にも恵まれたため結実は良好であった。

その後も好天に恵まれ、湿度が低く推移したため、黒星病の発生しにくい環境であったが、一部では多発した園が見られた。これは、前年の秋季に台風襲来による降雨が異常に多く、防除適期を逃した園では越冬菌の密度が高かったためと思われる。

夏季には台風が襲来したが、ネット栽培園では落果被害は少なかった。

湿度が低く推移したため、一部の園ではハダニが多発した。

## (4) くり

冬から春先にかけて比較的低温であったため、発芽をはじめ前半の生育は5～7日程度の遅れが見られた。4～6月は好天に恵まれ、気温も高く推移したため、花つきや実止まりは良く、着果数は多かった。

しかし、降水量が極端に少なく、激しい干ばつとなり、穂の肥大は悪く、穂中の含果数の減少が目立った。また、園によっては樹勢の衰弱が著しく、未成熟落穂の多発や樹体の枯死も見られた。このため、収量は減少した。

(5) いちじく

発芽は平年並でその後の着果時期、収穫時期等も平年並で推移した。着果期～果実肥大初期に当たる6月、収穫盛期の9月に降水量が少なく、やや小玉傾向となった。

本年は、近年いちじく生産に大きな打撃を与えている台風等の強風による葉擦れ果の発生が少なかったこと、収穫期にも比較的降雨が少なかったことから、例年一定割合で発生するロス果が少なく、収穫量が大幅に増加した。

病害では疫病、そうか病、さび病等が見られたが、発生は平年並～やや少であった。本年の特徴として、6月頃から収穫期にかけて葉の黄化から落葉を示す樹が各産地で発生した。農業技術センターを中心に調査を行ったところ、株枯病、白紋羽病による樹勢衰弱がかなり確認された。平成16年に台風被害(樹の倒伏による根傷み、主枝折れ等)を受け、その被害部位からこれらの病害が感染したことが推定される。害虫では、スリップス類の発生が多かった。

2 生産・販売状況と課題

(1) ブドウ

ア デラウェア

初出荷は昨年より5日遅く4月20日からであった。5月までの出荷量は、天候に恵まれほぼ平年並みの出荷量であった。収穫最盛期の6月は、極端なピークもなく安定した出荷ペースとなった。

品質面では、出荷当初に食味良好との評価を受けていたが、5月下旬から6月上旬にかけて酸切れの悪いものがあるとの指摘があった。6月までは裂果による事故がほとんど発生しなかったが、小粒傾向でパック比率が高かった。7月以降は干ばつ傾向が一転し、集中的な降雨となり、裂果が発生した。

販売状況は、5月中旬までは比較的順調な販売であったが、5月下旬から週末の消費地での天候不順等の影響で店頭販売が振るわず、また出遅れていた他産地の急増や他の施設もの入荷量が増加し、販売状況は厳しい状況となった。7月に入り品質低下はあったものの、他の競合果実が高い売価による販売不振に苦しむなか、スムーズな販売が7月中旬まで続いた。

イ 巨峰その他の品種

巨峰は面積の減少と7月上旬の降雨・曇天の影響から裂果・着色遅れが顕著となり、大幅な出荷量減少となった。販売状況は全国的な品薄感のなか堅調に推移した。

第2表 デラウェアの年次別栽培面積と出荷量 (単位：面積ha、出荷量t、反収kg)

	61年	62年	63年	元年	2年	3年	4年	5年	6年	7年
面積	447.8	425.0	404.9	392.9	383.9	367.9	349.2	341.3	320.2	319.6
出荷量	4,047	4,076	3,868	4,049	3,523	3,000	3,007	3,087	2,847	2,917
反収	904	959	955	1,031	918	815	861	904	889	918
	8年	9年	10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年
面積	303.6	297.0	290.4	288.1	268.8	263.1	257.8	260.7	258.8	247.0
出荷量	2,680	2,614	2,241	2,403	2,556	2,476	2,460	2,457	2,537	2,370
反収	883	880	772	834	951	641	954	942	980	959

\*平成17年JA全農出荷反省会資料

(2) かき

降水量が少ない時期があったため果実肥大がやや劣り、例年よりも小玉傾向となった。9月の好天で果面の汚れは例年より少なかったが、スリップス、カキサビダニの加害による格落ちが例年より多かった。

本県の主要品種である西条について共販の状況を見ると、初出荷は平年並の10月6日から行われたが、出荷ペースが前年と比較するとやや遅く、10月上～中旬の出荷量は例年より少なめで推移した。10月下旬になって出荷量が前年実績を上回ったが、全国的な秋果実全般の豊作基調、果実消費の伸び悩みにより価格が低迷した。産地においては出荷停止、あんぼ柿材料への振り向け等の対策がとられたが、価格は回復しなかった。最終的には出荷量771t(計画比93%、前年比122%)、平均単価209円/kg(前年比64%)となった。

近年、生産が伸びてきているあんぼ柿は、各地での加工施設増強と生果出荷の価格低迷からさらに出荷量が伸び、販売数量(主要産地計・農業技術センター技術普及部調べ)648千個(前年比145%)となった。

次年度へ向けた課題としては、①適正な樹勢を目指した栽培管理(特に弱勢樹の樹勢回復)、②基本的な栽培管理の徹底による収量・品質の向上、③収穫後の果実の取り扱い方法の改善による軟果発生防止、④病害虫の発生状況に合わせた防除の実施、⑤「スマートフレッシュ」処理技術の導入、冷蔵出荷・あんぼ柿加工の強化など販売対策の実施等がある。

第3表 17年産西条柿の時期別出荷状況

単位：kg、%

時期 年度	9月		10月			11月			12月
	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上~下旬
17年		1,655	51,430	195,533	273,313	134,118	79,648	22,620	13,285
16年	70	4,960	62,155	192,609	227,606	102,538	28,573	3,612	12,820
対比	—	33	83	102	120	131	279	626	104

\* J A全農島根県本部出荷反省資料より抜粋

(3) なし

前年に大きな台風被害があったため、昨年の出荷量は前年対比149%と大きく増加したが、単価は同88%に低下した。

二十世紀を中心とする青梨は、出荷量が同119%であったが、降水量が少なかった割には期待したほどの糖度でなかったこともあり、単価は同95%にとどまった。

幸水・豊水を中心とする赤梨は、台風被害が少なかったことと成園化の進展により、出荷量が同170%に伸びたが、出荷量の急増などにより単価は同83%と低迷した。

単位：kg、円、%

区分	青梨		赤梨						計	
			幸水・豊水など		愛宕					
	出荷量	単価	出荷量	単価	出荷量	単価	出荷量	単価	出荷量	単価
17年	123,822	178	215,070	193	21,932	249	237,002	199	360,824	191
16年	103,440	187	132,470	228	6,927	484	139,397	241	242,837	217
対比	119	95	162	84	316	51	170	83	149	88

\* J A全農島根県本部資料より抜粋

(4) くり

降水量が少なかったため、小果の多発、穂中の含果数の減少、未成熟落穂の発生などにより、出荷量は前年対比61%と大きく低下した。

出荷量が激減したため、単価は同135%に大きく上昇した。

園によっては樹の衰弱が著しいため、樹勢回復が課題である。

単位：kg、円

	出荷量	単価
17年	23,657	574
16年	38,756	425
対比	61	135

\* J A全農島根県本部資料より抜粋

### (5) いちじく

近年多発した台風被害がなかったこと、収穫期の天候が比較的好かったことから、やや小玉傾向ではあったが過去最高の出荷量、販売額となった(主産地であるJAくにびき、JAいずも出荷実績から推定)。県内産いちじくの大部分は地元山陰地区の市場へ出荷されているため、出荷量の増大に販売がやや追いつかず、平均単価は例年より2割程度安くなった。

主産地である出雲市多伎地区(通称「多伎いちじく」)では、販売対策としての県外出荷や加工事業の拡大に取り組んでいるが、今後、大規模経営体の出現により生産量の拡大が見込まれることから、販路拡大等の取り組みが当面の課題である。

## 3 病害虫の発生状況

### (1) なし

#### ア 黒斑病

初発生は5月10日で平年よりやや遅かった。5月中旬～6月下旬の降水量は少なく、病勢は全般に緩慢であり、発生量は平年に比べて少なかった。

#### イ 赤星病

冬孢子堆の100%成熟日は平年に比べてやや早い4月11日であったが、3月下旬から4月中旬までの降水量が平年より少なく初発生は4月20日で平年並みであった。全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。

#### ウ ハダニ類

カンザワハダニの越冬量はやや少なく、生育初期の発生量はやや少なかった。その後、6月は増殖に好適な気象条件が続きやや増加したものの、適期の薬剤散布等で全般の発生量は平年に比べてやや少なく推移した。

#### エ アブラムシ類

3月下旬の気温が低く経過し発生時期が遅れ、初期の寄生梢率、寄生程度はやや低かった。4月以降は高温で経過したため、5月下旬には寄生新梢率はやや高く、寄生程度ともやや多くなり全般の発生量はやや多くなった。

### (2) ブドウ

#### ア 褐斑病

6月下旬に初発を確認した。発生量は少なかった。

#### イ チャノギイロアザミウマ

ハウス栽培デラウエアの圃場で園内越冬個体によると考えられる発生が4月下旬に認められた。ハウス栽培園への侵入量は多くなかったと考えられるが、5月下旬以降増加し、発生量は平年に比べ多くなった。

#### ウ ハダニ類

4月下旬から発生が認められ、5月下旬以降やや多くなった。発生量は6月下旬以降やや多くなり、一部の圃場で葉の黄化、早期落葉が認められた。全体の発生量はやや多かった。

エ フタテンヒメヨコバイ

無加温ハウス栽培ブドウでは平年並みの5月下旬から発生が見られ始めた。発生量は初めやや少なく推移したが、収穫終了後の8月以降やや多くなった。

(3) かき

ア 炭疽病

果実での発生は7月下旬から予察園で見られた。9月に入り全般に見られるようになったものの発生量は少なかった。

イ うどんこ病

7月下旬に初発を確認した。その後、県下各地で発生が認められたが、8月下旬から9月は降水量が少なく、全般の発生量は少なかった。

ウ カメムシ類

フェロモントラップ、予察灯とも4月29日から誘殺された。5月中旬以降の誘殺数は平年より少なく推移した。予察灯では9月上旬に誘殺数が増加したが、その後気温が低くなると減少した。かき果実の被害は平年に比べて少なかった。本年はヒノキの花粉飛散量が多く、ヒノキ毬果も多かったと考えられ、カメムシのヒノキ毬果から離脱が遅くカキ園への飛来が遅かったと考えられる。

(山本孝司・小室正夫・長岡義治・高田 光・板垣紀夫)

## 茶 樹

### 1 気象状況と茶樹の生育

2～3月の気温は平年並みではあるが、3月は曇りや雨の日が多く、中旬には大雪となった。このため萌芽は昨年に比べ5日遅れて4月9日であった（農業技術センター生育調査ほ場）。霜害の発生は生育が遅れていたこともあって少なかったが、津和野の一部では霜害があり摘採時期が遅れた。また4月24日、27日に軽い霜害が見られたところもあった。

萌芽後は気温が上がり生育が促進された。しかし少雨傾向は生育をやや抑える方向に働いていたと思われる。1番茶の摘採は昨年比1日の遅れとなった。

4月からの少雨傾向は5月上旬に一息ついたもののその後も続き、6月10～11日の待望の降雨は、津和野では40mmであったが出雲では16mmと少なく、少雨を解消するには至らなかった。梅雨入りとなった6月11日以降も少雨傾向は続き、2番茶の生育は昨年に比べ7日の遅れで、また不揃いとなった。少雨による樹体の衰弱は、次年度の生育に影響を与えかねない状況となった。特に幼木や中切り更新した園では、芽の伸びが悪く干ばつの影響を大きく受けた。

7月1日からは集中豪雨となり、干ばつ傾向の解消により、ようやく生育が進んだ。

9月以降は高温少雨傾向で推移した。生育がやや遅れて秋冬番茶の摘採は10月中頃から下旬にかけて行われた。

### 2 病害虫の発生状況

病害虫の発生については、少雨により害虫が例年になく多発し、2番茶の生育に大きな影響を及ぼした。特にカンザワハダニが多発し、防除を行っていない園や防除が遅れた園では2番茶の摘採が不可能となり、なかには落葉の激しい園もあった。また、チャノミドリヒメヨコバイが多発して、葉先から葉縁にかけての黒変や落葉により生育が止まった園も多かった。チャノキイロアザミウマも同様に多発し2番茶の生育を抑制した。その他にチャノホソガ、チャノコカクモンハマキなどの発生した園もあった。

7月の集中豪雨以降は、カンザワハダニの発生はやや落ち着いた。しかし、その後もチャノミドリヒメヨコバイは多発し、新芽の伸びの止まった園が多く見られた。また、炭そ病の多発した園もあった。

### 3 販売状況

1番茶の出荷は、昨年より5日遅れて5月6日となり、5月30日まで出荷された。親子番茶は5月19日～6月15日、2番茶は7月1日～7月27日、3番茶は8月10日～9月7日に出荷された。出荷量は1番茶が20,565kg、親子番茶が9,348kg、2番茶が5,082kg、3番茶が1,260kgであった。2番茶は、害虫の発生で摘採を行うことができなかつたところが多く、出荷量は少なかった。1kg当たりの平均単価は、1番茶が1,728円、親子番茶が630円、2番茶が607円、3番茶が472円であった。

### 4 次年度に向けて

#### (1) 適切な生葉管理

農畜産振興課が実施した1番茶品質改善通信指導（1番茶を茶アドバイザーに送付して評価を得る）では、生葉管理が不適切で、生葉の鮮度保持が不可欠であるとの指摘があった。高温時の摘採には特に注意をして、次のことに心がける必要がある。

- ・品種の組み合わせや整枝時期を変えることによって摘採期間を長くする。
- ・工場の荒茶生産計画に応じて、必要な量だけ調達できるよう摘採計画を立てる。
- ・摘採した生葉は、日陰で風通しの良いところに置く。
- ・集荷をまめに行い、できるだけ早く工場へ搬入する。
- ・取り扱いは、ていねいに、清潔で、衛生的に行い、茶葉を損傷しないように注意する。
- ・生葉をよくほぐして、むらのないように平均に積み上げる。
- ・生葉は新鮮なうちに製造する。

## (2) 病害虫の防除

小雨時には害虫が多発し、多雨時には病気が多発することを念頭に置き、適期を逃さず早めに防除するようにしなければならない。

## (3) 干ばつ対策

土壌水分の蒸発防止のため、茶園に敷き草や敷きわらを行う。幼木は根量が少ないので干ばつの影響を受けやすい。かん水量は少なくすむのでかん水をする。

干ばつに強い茶樹にするため、土壌構造が不良な園では有機物の供給や深耕・耕うん並びに排水対策などを講じて土壌改善を図り、根の分布を深め、保水性を良くしておく。

今後新規造成を行う場合は、かん水のための水源の確保を考慮する。

(神城 文典)

## 造 林

### 1 雪害

1月1日～4日と2月3日頃に県西部を中心に大雪、着雪等による幹折れ・裂け、根返りなどの雪害が局所的に発生した。

被害が多く発生した森林の特徴としては、

- ・ 齢級が4齢級（20年生）～6齢級（30年生）のスギの造林地
- ・ 胸高直径（地面から1.2mの高さの直径）が20cm程度の立木
- ・ 谷筋、窪地など雪がたまりやすい箇所で局所的な被害が多い
- ・ 形状比〔(樹高÷胸高直径)×100〕が90～95
- ・ 密度調整のための間伐を実施した直後の森林、もしくは未実施の森林
- ・ 前年の台風被害木が周辺にある森林

12月にも記録的な豪雪により、主に山間部のスギ造林地での雪害が発生したが、大面積に及ぶ被害はなく、単木で折れているものが多かった。

また、12月から長期にわたる低温・着雪害により、奥部の広葉樹への雪害も軽度であるが発生した。

雪害の発生を抑える上でも、間伐の実施は重要であり、適期に間伐作業を実施しながら、形状比が80以下になるように造林地の管理を行う必要がある。

### 2 干害

#### (1) 造林地

4月～6月の少雨・高温により、植栽後1年～2年の造林地において干害が発生した。

特に、海岸部の造林地は、砂地であるため、山間部より地温が上昇しやすく、被害も発生しやすい状況であった。

昨年も同様な時期に少雨・高温により干害が発生しており、今後、植栽1年～2年の造林木を干害から守るためにも、以下の事項に十分留意しながら、管理を行う必要がある。

- ・ 最も重要なのは、適期に植栽し、造林木の根が確実に張り、しっかり活着できるように植え付けることである。
- ・ 下刈り作業は、少雨・高温期に入る前に終了させ、刈り取った草を造林木周辺に集め、土壌中からの水分蒸発を少しでも抑えることが必要である。
- ・ 少雨・高温時期の下刈りは、造林木周辺の土壌水分を多量に蒸発させるため、実施時期を見合わせる。

#### (2) 苗畑

造林地同様、少雨・高温による水分ストレス等により、床替え時期が5月中旬と遅かったヒノキの苗畑でヒポデルマ枝枯病が発生した。（詳細は「森林保護」に記載）

### 3 寒風害

12月の平均気温が平年より-2.7度と低かったため、常緑広葉樹のヤマモモ・クロガネモチ・サンゴジュなどの庭園木において、寒風による被害が発生した。

(坂越浩一)

## シイタケ

### 1 平成17年産シイタケ発生状況と気象

昨春の気象環境は、2月までは例年どおり適度な寒波で芽切り～生育に適した環境で推移した。3月になると例年は徐々に気温が上昇し、順調な生育となるところであるが、中旬に寒気の戻りで降雪があり芽の枯死、芽切り後に生育が止まるなどの影響があった。ところが、4月に入ると例年になく急激な気温の上昇と、平年より少ない降水量のため椎茸の生育時に必要な水分が不足する状態となり、ホダ場が乾燥しがちとなり、小葉系が多く発生するなど最悪の気象条件となった。こうした中で散水施設、防風ネット等を整備しているホダ場においては収穫は良好であったようである。また、技術的なこととして古ホダ木対策としては鉋目、釘目などを入れ吸水性をよくしてやるのが効果的であり、この手間を惜しまないようにすることも大切である。

平成17年次のシイタケの発生、収穫の概況は次のとおり。

(1) 乾シイタケの生産量は41.1トンで対前年比78.4%であった。

生育時の3月の戻り寒波で芽切り後の枯死があったこと、近年の植菌量減少による有効ほだ木数の減少などが原因と考えられる。

(2) ウス小葉系の発生が多い。

古ほだ木の割合が増加、大雪・強風で寒子の芽切り・生育の抑制、水分不足が続く中で急激な気温の上昇に伴い一気に生長したため等が原因と考えられる。

(3) 花亀裂の入った茶花どんこ規格が多い。

寒波とその後の急激な温度上昇と乾燥により花亀裂の入りやすい気象状況となったため

### 2 平成18年春子の予測

本県の椎茸発生量を推測するときの因子として、植菌量、用役ほだ木本数等があるが、なかでも秋期の原基形成時から収穫時までの気象条件が重要である。

昨秋からの気象条件であるが、秋子～寒子～春子の発生については12月の大雪（平成18年豪雪）を境に里部と山間部に差が出て芽切り・生育に大きな違いが見られた。11月からの秋子の発生時は山間部、里部とも当初は最適な生育環境であったが、12月4日頃からの大雪は松江地方では平均気温が例年より約2℃低い6℃前後、山間部の邑南町の瑞穂では平均気温が例年より約3℃低い1℃前後で推移した。さらにこの平均気温が零度以下となる低温現象が山間部では1月になっても続き、芽切り後の椎茸の生育に悪影響を与えた。その一方で里部である松江・出雲・浜田などの平均気温は平年より低いものの、2月下旬には最高気温が15℃まで上昇し積雪がない里部では春子と見間違ふほどに一斉に発生した。

今後の発生見込であるが、里部では寒子採取後の3月に今後どれだけ追い芽が発生するか左右されてくる。山間部では昨年と同様に3月は寒暖の差が激しい気象条件下で順調な芽切り～生育が見られているものの、融雪が遅れ収穫ピークは4月にずれ込むと思われる。県全体では芽切り数が多く小葉系統の発生が多くなると見込まれるが、生産量は例年並みと思われる。

なお、県では新たに島根県の環境に適したシイタケ10品種を関係者と協議し推奨品種として選定しました。最近品種の偏りが見られますが、近年のように異常気象が続くなかでは経営上1品種を避け数品種導入で危険分散することも必要です。生産者の皆さんは規格に対する市場動向、ホダ場環境、採取時期等を勘案して最適な品種、出荷規格を考えて栽培をしていただきたいと思ひます。

(菅田 勲)

## 森林保護

### 1 林業苗畑の病虫害

#### (1) 苗立枯病

出雲市と斐川町のヒノキ苗畑で7月に激発した。ヒノキ1年生苗が罹病し、被害面積は150㎡であった。被害程度は生育苗の半数以上が枯死する激しいものであった(中山間地域研究センター調査)。

本病の病原菌は土壌中に生息し、主として苗木の根を侵す。本病は多雨または干天時に多発するが、被害苗畑の7月の降水量が多かったことが本病激発の原因と考えられた。

対策としては、種子消毒や苗床の土壌消毒などが有効である。

#### (2) ヒポデルマ枝枯病

6月中旬、奥出雲町の1苗畑でヒノキ2年生苗の葉が褐変する症状が発生し、中山間地域研究センターによって「ヒポデルマ枝枯病」と診断された。7月上旬には生育する苗木5万本の約40%に当たる2万本が罹病し、うち4千本が枯死する激害が生じた。

本病は地際部の主軸が侵され、のちに苗木全体がしおれて枯死する。本病菌の病原性はそれほど強いものではないが、ヒノキ苗が何らかの原因で衰弱した場合に激発することが知られている。

被害発生を認めた奥出雲町の本年の降水量は、苗木の生育開始期である4～6月に著しく少なく、このことが苗木の衰弱をもたらし、ひいては本病激発の原因となったと考えられた。このような気象条件にあるときは必要に応じて苗床に散水するなどして、苗木の管理に充分注意する必要がある。

### 2 林地の病虫害

#### (1) 松くい虫(マツ材線虫病)

18年3月末現在の松くい虫被害量は36,500㎡で、昨年度の27,800㎡を上回っており、とくに隠岐島での被害量増加が目立った。

本病被害量の多少は夏期の気象条件と密接な関係がある。病原線虫の媒介昆虫であるマツノマダラカミキリは本県では6月上旬～7月中旬に脱出するが、成虫の活動は高温小雨時に活発となって線虫の伝播頻度が高まり、ひいては被害木の増加に繋がる。また、夏期の高温は発病の進展を早め、マツノマダラカミキリの産卵時(7～8月)には産卵対象となる衰弱・枯死木が多量に生じる。その結果、次年度のマツノマダラカミキリ発生数が増加して、周囲への被害拡大が激化する。

本年夏期の気象状況をみると、6月上旬～7月上旬と8月上～下旬の平均気温は平年に比べて高く、また6月の降水量は極めて少なかった。これらの気象条件が成虫の活動を活発化させ、被害増加の原因となったと考えられた。

### 3 特用林産物の病虫害

#### (1) サカキ輪紋葉枯病

本病はサカキの重要病害であり、罹病葉には褐～赤褐色の斑点が生じ、これが急速に拡大して、同心円状の濃淡のある病斑になる。病葉は早期に激しく落葉する。したがって、サカキを枝物商品として栽培している地域では最も注意すべき病害である。

本県では津和野町商人のサカキ生産組合所有の栽培地で発生を認めている。被害は数年前から生じ、多雨時に激発して大きな問題となっている。被害発生地では例年5月下旬から6

月上旬に本病が発生するが、本年はこの時期の降水量が50mmと少なく発生を認めなかった。しかし、6月下旬以降まとまった降水があり、7月の降水量は350mmにも達して本病が激発した。

本病は病斑上にできた菌体自体が伝染源になると推察されていることから、病葉は摘み取り、また病落葉は集めて焼却することが防除上重要である。

(井ノ上二郎)

# 平成17年 農業気象災害被害状況

単位:ha,千円

種類名	4月20日の強風による災害		4月中旬からの少雨による災害		7月1日から5日までの大雨災害		台風第14号による災害		12月5日の強風による災害		12月5日からの大雪による災害		合計	
	面積等	被害額	面積等	被害額	面積等	被害額	面積等	被害額	面積等	被害額	面積等	被害額	面積等	被害額
水陸稲		381	0.35				160.89	29,948					161.24	30,329
雑穀、いも、豆類							25.00	2,000					30.50	3,176
農 野菜	0.25	539			0.32	305	1.60	253			1.44	6,820	3.61	7,917
果 樹	0.48	50			0.20	1,200	96.80	20,368					97.48	21,618
作 工業作物														
物 花き											0.27	12,354	0.27	12,354
桑														
茶														
その他														
小 計	0.74	589	0.35	381	0.52	1,505	284.29	52,569			7.21	20,950	293.11	75,394
果 樹											8.96	32,774	8.96	32,774
樹 桑 樹														
体 茶 樹														
小 計											8.96	32,774	8.96	32,774
施設被害							0.32	963					18.20	508,136
合 計	0.74	589	0.35	381	0.52	1,505	284.61	53,532	1.95	5,790	32.11	554,507	320.27	616,304
被災市町村	益田市、旭町		益田市		大田市、仁厚町、温泉津町	益田市、温泉津町	益田市、安来市、温泉津町、江津市ほか		出雲市、益田市	島田郡、飯南町、豊南町、豊南町、邑南町、安来市、津和野町ほか				
被害状況	パイプハウス被害		水稲		メロン、ぶどう、キャベツ、なす	水稲、なし、かき、パイプハウス被害など			パイプハウス被害	ぶどう樹体、りんご樹体、パイプハウス被害など				

注1. 4月20日の強風による災害は数箇の外、蕎麦1件 被害額300千円、蕎麦栽培施設2件55㎡ 被害額550千円がある

市町村別被害状況(被害金額)

単位:千円

異常気象名		4月20日の強風による災害	4月中旬からの少雨による災害	7月1日から5日までの大雨災害	台風第14号による災害	12月5日の強風による災害	12月5日からの大雪による災害	合計
振興C	市町村							
松江	松江市							
	安来市				9,000		27,650	36,650
	東出雲町							
	小計	0	0	0	9,000	0	27,650	36,650
木次	雲南市						87,903	87,903
	飯南町				160		133,701	133,861
	奥出雲町				2,000		263,976	265,976
	小計	0	0	0	2,160	0	485,580	487,740
出雲	出雲市					3,561		3,561
	斐川町							
	小計	0	0	0	0	3,561	0	3,561
川本	大田市			1,344	1,200			2,544
	仁摩町			41	450			491
	温泉津町			120	6,400			6,520
	川本町				1,200		1,920	3,120
	美郷町						2,733	2,733
	邑南町				100		18,200	18,300
	小計	0	0	1,505	9,350	0	22,853	33,708
浜田	浜田市				300		5,271	5,571
	金城町				130			130
	旭町	310			2,476			2,786
	江津市				6,329			6,329
	小計	310	0	0	9,235	0	5,271	14,816
益田	益田市	279	381		11,760	2,229	161	14,810
	津和野町				1,000		10,800	11,800
	日原町				354			354
	吉賀町						1,492	1,492
	柿木村				353			353
	六日市町				5,200			5,200
	小計	279	381	0	18,667	2,229	12,453	34,009
隠岐	隠岐の島町				1,120		700	1,820
	海士町				4,000			4,000
	西ノ島町							
	知夫村							
	小計	0	0	0	5,120	0	700	5,820
合計		589	381	1,505	53,532	5,790	554,507	616,304

注1. 市町村名は災害発生時のもの

注2. 4月20日の強風による災害は表記の外、旭町で菌床栽培施設において被害額550千円、益田市で畜舎において被害額300千円がある